「聖少女」論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神於, 希衣 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4687

「聖少女」論

神於希衣

序

倉橋由美子著「聖少女」は、語り手の「ぼく」ことKが未紀という少女について書いた手記（小説）という体裁をとっている。作品の中心となるのは未紀と彼女の実の父「パパ」との近親相姦であり、自身も姉Lと近親相姦の関係にあるKが、記憶喪失となった未紀が記したノートの謎――未紀と「パパ」との関係に迫っていくという形で物語は進行していく。

倉橋はこの作品で近親相姦を取り上げたことについて、「わたしが近親相姦を小説に書くのは、これをいかにして聖化するか、という課題に魅力を感じる」[1]からだと述べている。これは「いかに」近親相姦という「悪」を書けば「聖化」できるのかということで、「課題」の焦点は「いかに」書くかということにある。つまり「聖少女」は近親相姦という「悪」を「聖化」するほどの力を持つ「小説」とは何か、という問題について書かれた小説である、と考えられる。

また、「聖少女」の語り手はKだが、間に未紀が記したノートが挿入されており、未紀とKの「ことば」で構成されている小説であるといえる。ゆえに〈未紀とKは何故この「小説」を書いたのか〉という問題は、「聖少女」の核心に迫る最大のテーマであろう。本稿では二人の「書く」という行為についての考察をこころみる。

その前に、作中で重要な役割を担う近親相姦と結婚について簡単に述べておく。

未紀と「パパ」の父娘、KとLの姉弟の二つの近親相姦は物語の動力源である。倉橋作品には「K」、「L」という記号を持つ肉体的・精神的に双子の関係にある姉弟の組み合わせが頻繁に登場し、彼らは肉体だけでなく精神でも媾わることができるいかがわしい存在として造形されている。近親相姦は「聖少女」のみならず、倉橋の作品全体を読み解くキーワードの一つであるといえるが、ここでは

「聖少女」の構成要素の一つとして扱われている。

作中における近親相姦には二つの性質がある。一つは、近親同士で交わることが動物的であることから、近親相姦は自然に属する反社会的な「悪」であり、そのために禁忌とされているが、同時に神や神に近い王族には許された「聖性」をもつ行為である、ということだ。一見、矛盾しているように思えるが、禁忌と「聖性」には密接な関係がある。『宗教学辞典』[2]によると、世界を〈聖〉と〈俗〉の二領域に区別することは宗教思想の特徴の一つであり、〈聖〉は〈俗〉から区別されたものである。ゆえに〈聖〉に容易に近づくことは禁止され、その境界として禁忌（タブー）が生まれる。タブーの対象には〈触れることが許されない清浄なもの〉と〈触れると不浄なもの〉の相反する二つが含まれ、両者とも聖なるものの領域に入っており、「聖とタブーは不可分に結びついて」いるのだと説明されている。すなわち近親相姦は〈人間には禁じられているが、神々には行える行為〉つまり〈聖なる行為〉であり、〈聖なる行為であるが故に人間には禁じられている〉ということになる。〈清浄なもの〉と〈不浄なもの〉が同じ「聖」に属し、結びついているということは、両者は互いに転換が可能だということであり、「聖」であると同時に「悪」であるという性質を近親相姦は備えているといえる。

もう一つの性質は自己愛である。澁澤龍彦氏[3]も述べているが、人間個人にとって最大の近親者は自分自身にほかならず、自分を愛する自涜の延長線上に近親相姦は成立している。近親相姦の愛の性質は他者を愛することではなく、自分を愛することなのである。

この二つの性質に、未紀と「パパ」、KとLの二組をそれぞれ当てはめることができる。

未紀と「パパ」の場合は、〈聖なる行為〉としての関係をめざしたものである。未紀は「悪」と「聖」の転換が可能という性質を利用し、現実の人間社会では「不可能な愛」である自分たちの近親相姦を「小説」にすること、つまり「ことば」を使うことで「聖化」しようとした。これは先述した「聖少女」のテーマに大きく関わっている。

一方、KとLのペアは自己愛の近親相姦である。二人の交わりのきっかけはKの自慰の延長線上にあり、つながるときの痛みもLと共有し、「他人同士のあいだには絶対にない種類のやさしさ」を感じている。KとLは精神・肉体ともに相似形である以上、彼らが互いに愛しあうことは鏡に映った自分を愛しているのと同義であろう。また、未紀らのように聖なる近親相姦へ昇華できなかったのは、「ことばが使えるだけの距離がぼくらのあいだにはなかった」というKとLに特有の性質のためである。自身を慰めるのに「ことば」は不要であるゆえに、Kは未紀のように「ことば」を用いてLとの関係を「聖化」することができなかったのだ。

ここで重要なのは、二組の近親相姦は近親相姦が持つ二つの性質をそれぞれに与えたものであり、その差は「ことば」が使えるか否かによって左右されているということである。

次に結婚についてだが、これは近親相姦の暗い輝きに呑まれて本作品ではあまり目立っていない。が、未紀とKの結婚によって物語

が終っていることや、結婚は倉橋の他作品やエッセイなどで幾度も取り上げられているテーマであることから、「聖少女」を語る上でもはずすことはできない要素である。そこで以下に作中における結婚とはどういうものであるかを示しておく。

倉橋の一貫した結婚観の基本は、結婚とは愛の問題ではなく「生活」の問題であるというものであるが、「聖少女」に登場する結婚も、この甘さが微塵もない結婚観が反映されている。ここで結婚という制度は、男は女を所有し、女は男に所有されるという「所有の形式」であり、同時に社会的拘束力によって、互い以外の人間と関係を持つことを許さない「自由を捕縛」[4]する極めて社会的なものとして機能している。こう書くと、結婚は女にとって窮屈で不自由なものであるというおきまりの理屈におさまってしまうようにみえるが、作中では逆に利用されている。物語の終盤、「パパ」を失った未紀は意識的に自ら発狂した狂人――Kの言葉を借りると「にせの人間」――となり、肉体を精神病院に捨てることで「パパ」との「時」を養うのに「ふさわしい場所」へ、「別の世界」へ行こうとする。社会的存在としての自分に「狂人」というラベルを貼ることで、「パパ」を愛した精神の方の未紀は「パパ」への愛を抱いて、現実の誰にも邪魔されない「別の世界」へ逃亡することを企てるのだが、最終的に「精神病院に逃げこむかわりに」「結婚のなかに自分の死体を遺棄」することになる。

倉橋のエッセイ「妖女であること」に次のような箇所がある。

もともと男にとっては結婚も家庭もひとつのフィクションにすぎませんから、夫、父、一家の主人といった形式を無難に演じることは案外やさしいことでしょうが、女にとっては家庭は生きるということの実質そのものです。いくらなんでも、生きること自体をひとつのフィクションとして演じようというのは、そらおそろしいたくらみであり詐欺行為です。（中略）

ほんとうは女ではないのに、女の姿かたちをもっていることを利用して生きていこうというのはいかがわしくあやしげなことですがこのあやしさと、女の形をした人間が小説を書くということは、かならずひとつになっていて、シャム兄弟のように切りはなせないものです。（中略）これは妖女です。[5]

女にとって生きることそのものである結婚を、フィクションとして演じる。未紀の結婚はこの「詐欺行為」つまり結婚という制度を利用して社会に潜り込み、世界を欺きながら生きていこうとすることだったのである。

Kと結婚することは、「社会的存在としては夫の妻として、もっぱら夫の地位に結びつけられその装飾的役割をはたす」[6]〈K夫人〉というラベルを自身に貼り、「存在の証明書」[7]を手に入れることだった。結婚を使って未紀はKに社会的存在という外皮の自分を所有させ、社会における自存在を保とうとする。Kとの結婚はそのための手段であったのだ。

さらに、この詐欺行為をはたらく「妖女」は必ず「小説を書く」能力を備えているのだと倉橋は言っているが、ここでも「小説を書く」という行為が特別視されていることに注目したい。

では、「聖少女」を構成している主要な二柱を大まかに確認したところで、以下から本題に入る。

一　未紀のノート

未紀は作中で三種類のノートを書いている。それぞれを区別して、未紀が交通事故で記憶喪失になる前に書いたノートをノートⅠ、記憶喪失になってからの出来事を書いたノートをノートⅡ、最後にKに全てを告白したノートをノートⅢと呼ぶことにする。ここではKが未紀に強い関心を寄せる最大のきっかけであり、作中でも重要な位置を占めるノートⅠについて考える。

ノートⅠは「不可能な恋人であったパパに対するあたしの不可能な愛を聖化しようとした」ことを目的に書いた「小説」、つまり「嘘」である。この中で「パパ」は、未紀の母の昔の恋人の歯科医である（未紀の「戸籍上」の「父」は「パパ」と全く異なる「田舎者」として登場する）。彼が実の父親かもしれないということを知りながら、未紀は「パパ」と深い関係になっていく。しかしKも指摘しているが[8]、この「パパ」が実の父親かどうかという肝腎な点は曖昧で、ノートⅠの二人の近親相姦は可能性の域を出ない。ここに書かれている出来事は、Kと出会ったことや友人Mのこと、Kに結婚を申し込んだことなど客観的に確認できる「事実」が含まれており、百パーセント「嘘」ではないが、実の父親との近親相姦という重大な「事実」については不確かである。

未紀はノートⅠと同じように、歯科医の中年男性と交際しているという「嘘」を実際に友人Mに話しているが、ここに書かれた「パパ」と未紀の関係は、Mが語ったようにただの「小悪魔的な少女と中年のプレイボーイとの情事」にすぎない。だが、未紀はノートⅠを「不可能な愛を聖化」しようとして書いたという。未紀が「パパ」との愛を「うんざりするようなレッテルを貼られて分類されてしまう」ものに仕立てたのは何故だろうか。

Kが小説家である作家と呼ばれる女性にノートⅠを見せて意見を求めたとき、

「とにかくこれは小説だわ。小説って、あなたが事実ということばで考えているものに対して、あるパラドクシカルな関係をもつものなのよ。あなたは未紀さんがこの小説を、なにかを伝えるために書いたとおもうでしょうけれど、むしろなにかを隠すために書いたのかもしれないわ」

と彼女は言う。これを未紀と同じく「小説」を書く人間である作家による、ノートⅠの謎の種明かしと見ると、未紀が隠したのはわざと曖昧にしている「パパ」との本当の関係、近親相姦のタブーであろう。では、何故未紀は隠したのだろうか。

「パパ」が亡くなった数日後、未紀の家を訪ねたKは使用人「ばあや」の次のようなことばを聞く。

ぼくはばあやがカーテンをひきながらしゃべりつづけているひとりごとをきいた。未紀の父は膀胱癌で死んだのだった！罰ガアタッタンダヨ、アイツハ、サンザンワルイコトヲシテキタ

カフナ、マッタク、アレハ自業自得トイウモンダヨ、自分ノ娘ト、畜生ミタイナコトヲシテ……（中略）だがいずれにしても、そのことばはけっして目的もなしに口走られたひとりごとではなかった。ことばはひとつひとつ杭のようにぼくのまわりにうちこまれ、ぼくを檻のなかにとじこめた。その効果の的確さにぼくは圧倒された。このばあやはただの無知な田舎の老婆ではなかった。表現はあまりにも整然としており、いくつかの観念的なことばにまじって、近親相姦ということばまで使われた。

「ばあや」は未紀と「パパ」を「ナニカラナニマデ観察」していて、二人が近親相姦の関係にあることを知っていた。「ばあや」の発言は現実の近親相姦がどう見られているかを表している。現実の眼が見る未紀と「パパ」の関係は、本人たちがどれほど愛しあっていても、卑しい「畜生ミタイナ」「ワルイコト」にすぎないのである。「ばあや」のことばは近親相姦を罪だとする感覚を持たないKさえ圧倒するほどの効果を持った、振り払うことが不可能な厳然たる現実と世界の拒絶反応そのものなのだ。

未紀はその現実、「パパ」との関係が卑しい「悪」にしかなりえない世界から二人を隠すことを目的にノートⅠを書いたのである。現実の世界では「パパ」との愛は「不可能な愛」でしかない。また、「聖少女」の原型である中編「わたしのこころはパパのもの」に、このような文がある。

きみは事実を伝へるためにあの小説を（とKはいったようにおもふ）書いたのではない。むしろ隠すために書いたのかもしれない。人は存在するものを隠すためか、存在しないものを存在させるために小説を書くのだから。[9]

二人の関係を世界から「隠す」のと同時に、現実では「存在しない」二人の愛を「存在させる」ために、未紀はノートⅠを書いたのだ。ノートⅠに書かれた二人の関係は、道徳的に非難される点はあれ、[10]近親相姦のような絶対的な禁忌や悪ではなく、世界から糾弾されることはない。作家は未紀のこころみについてこう推測している。

「……（中略）それはつまり、ことばを使って、架空の愛をつくること、ありえない、想像上の愛を……父と娘の近親相姦を聖化するにたる恋人同士の愛をね。未紀さんは小説家のすること を、その暗い関係のなかでやろうとしていたのよ。たとえば、このノートにはパパとベッドのなかで恋人同士のようにことばで愛撫しあったことが書いてあったでしょ、そんなふうに、パパとぐるになって恋人同士を演じていたんじゃないかしら。少なくとも彼女は自分だけでもそうしようとしたのよ、あのノートのなかで」

これは未紀の次のことばとも重なるだろう。

あの小説（またはたんに、あのノート）は、あたしにとって呪術の性質をもっていたようにおもいます。あたしの分泌したことばは、現実をとかして、現実と非現実の境にゆらめくかげろうのなかにあたしをとじこめるための呪文という性質をおびていました。

ノートⅠの中で、未紀は「パパ」との可能な愛を描き、「恋人同

士」を演じていた。しかし、これは演じられたいわば贋の「恋人同士」の関係、世界を欺く贋の関係である。事実、Kはノート I に書かれた「パパ」と、現実の未紀の「父」が同一人物だと気づくまで時間がかかった。その間、Kは未紀に欺されていたのである。

ノート I は未紀自身と世界を「欺すため」の「小説（嘘）」で、醜い「現実をとかして」「パパ」との近親相姦が「聖」でありうる世界、「現実と非現実の境」に自身を「とじこめる」ための「呪術」であったのだ。「ことば」を意識的に用いてもう一つの世界――「かげろう」のごとき夢をつくることが、このノートの目的だったのである。

二　Kの手記

次に物語の語り手であるKと彼の手記について検証する。「ぼくがはじめて未紀を知ったのはある秋の土曜日のゆうぐれどき、虎ノ門の近くの路上でだった」という書きだしからもわかるようにこれは未紀について書かれた手記であり、Kは「小説」と呼んでいる。書きだしたのは未紀に近親相姦について語り、姉Lとの関係について告白した日の夜である。この告白のあと、未紀はKに家出して行方不明になっていたLの居場所を教え、「Lサントオ会イニナッテ。アタシモパパト会ッテミマスカラ」と告げる。このことばがきっかけとなってKは手記を書きはじめたことになっている。

このときに発生した不安はぼくの胃のなかにラグビーのボールほどもある癌となって残り、それを分析しないですむように、ぼくは部屋に帰るなりウォッカのオンザロックをつくって何杯も機械的に飲まずにはいられなかった。それでも眠れなかったのでぼくは書いた。

いつのまにかぼくは二流小説家風の文体を獲得しはじめているらしい。だがいまぼくの書いているものが、首尾よく小説というものに化けるかどうか、ぼくは知らない。もともとぼくには小説を書く気がまえなんかなかったのだ。しかし七月にはいってもヴィザがおりず、こうして宙吊りになっている状態では、なにかを書かずにはいられないものだ。ひとは跳べないときに書くのだろう。

Kはこの「小説」を書くつもりはなかったが、「書かずにはいられない」事態に陥った。Lの件も原因だが、未紀の「パパト会ッテミマスカラ」ということばのほうが大きい「不安」だった。このとき、実は未紀の記憶はすでに回復していたから、このことばはノート I の内容に合わせてつかれた「嘘」である。次の機会に述べるが、未紀はKの「意識」を引き止めるために回復したあとも記憶喪失患者のふりをし、「嘘」の仮面をかぶり、彼の最大の関心事であり続けていたのだ。その様子はこのKのことばが最もよく表している。

それは性的充足のための手段としてぼくの気をひいたというより、認識の対象としてぼくを挑発していた。ぼくは大きな魚のような眼そのものになって未紀を食べてしまいたかった。しかしぼくが意識（むしろあこがれというべきだろう）を分泌し

て未紀という核を捕獲しようとすると、未紀はすばやく泳いで逃げた。変幻自在な女神のように。ドウシタラ彼女ヲ所有スルコトガデキルダロウ？

未紀の罠にかかったKは、「認識の対象」として彼女を捕捉したいという強い願望を抱く。ここで注目したいのは、倉橋は「K」と「L」の属性を「存在しないことを目指している存在、あるいは行動しない認識者」[11]であるとしていることである。このことばを借りれば、未紀が「医者」として選んだKの正体は、「ぼくの首が切りおとされてさらし首にされたとしたら、まっさきにそれをみにいくのはぼくだろう」というほどの優れた「認識者」であるといえよう。

では、この「認識」とはどのようなことをいうのか。倉橋の代表作の一つ、「スミヤキストQの冒険」では次のように定義されている。

> 認識とは存在するものにことばを貼りつけてそのむきだしの存在をおおいかくすこと、それを自在に引きまわせるようにことばの網をつけることにほかならない（後略）[12]

ただ物事や観念を「見る」だけではなく、「ことば」をそれらに貼りつけることが「認識」するということならば、Kが未紀についての「小説」を書いたのもうなずける。Kは未紀に自分の「ことば」を貼りつけ、「認識」して捕えるために書いたのである。これは「ぼくがこれを書くことは未紀に対するぼくの態度を決定すること」だというKのことばからもうかがえよう。やがてKは未紀を「認識」することに「意識」の大半を傾けるようになっていく。

「ええ、ぼくは未紀のことをおもっていますよ」

つまりぼくは意識を未紀にむけている。あるいは、ぼくは未紀にかかわって存在している。

未紀なしには自身の存在を確立できないほどに、Kは彼女に取り込まれていき、最後には結婚という鎖を使ってまで所有したいという願望を持つようになる。

「あたしと結婚してどうなさるの？」

「どうするって、いつもきみをみていたいのだ。ぼくはいつもきみをおもっていた。でもおもったり想像したりするだけでは不安で死にそうになる。きみのそばにいてみたりさわったりしたい。毎日髪ののびるのをみまもったり、冷たいおしりにさわったりしたい……」

（中略）

「いいか、これだけはきいておいてもらおう。ばかげたことに、ぼくはきみを愛しているとおもう。だからぼくはきみがどこへ逃げてもどこまでもついていってきみを理解する。きみをノエマの核にしてしまう。きみのことを考えるからぼくは存在する。きみは逃げられない。そういうわけだ」

「それであたしと結婚したいとおっしゃるのね」と未紀はためいきとともにいった。

Kは結婚を申し込む前、「ボクガ未紀ヲ愛シテイルノデハナイヨウニ（アア、ボクガホントニ愛シタトイエルノハLダケダ）」と、未紀を愛しているのではないと考えるが、彼女が精神病院に入るこ

とを仄めかし、結婚できない可能性がでてくると、「ぼくはきみを愛しているとおもう」と主張を変えている。平仮名で「あいする」というときは肉体を使って相手を虜にすることを意味し、漢字で「愛する」というときは「心の自由を捧げてしまうこと」を意味するという未紀の用語法に従えば、このときKは未紀のことを「認識」しなければ自分の存在が保てないほどに未紀に「心の自由を捧げて」しまったことになる。結婚することで完全に未紀を所有し、「ぼくの意識で捕獲してたえまなく愛撫する」という欲求は、逆に未紀に全てを捧げてしまうことであり、「ぼくはゆっくりと死んでいった。まるで壊疽にでもかかったかのように、ぼくは未紀のなかでとけてなくなった。これがぼくたちの結婚を意味していた」という最後の場面の描写はそのことをよく示していよう。

またこの「小説」を書くにあたってKはこう語ってもいた。

〔前略〕おそらく小説という怪物を成長させる術は、これに時間の餌を喰わせる以外になさそうである。つまりこれからぼくが生きる時間でこの怪物を養い、最後はこのぼくが小説に化けてしまうこと。そうと心をきめれば全速力で書きつづけるだけである。

この「ぼくが小説に化けてしまうこと」とは、自ら書いた〈未紀という物語〉に吸い込まれてしまうことであろう。これもKの結末を暗示している。

「認識者」Kの「ことば」の結晶であり、未紀を「認識」するために書かれた「小説」であるこの手記は、未紀のノートIと同じように特別な性質を持つものであるといえる。

一方は「現実と非現実の境にゆらめくかげろう」をつくって世界を欺すため、もう一方は対象を「認識」するために書かれた「聖少女」は性質の異なる二つの「小説」が組み合わせられた作品であるが、それは偶然ではなく、「小説とは何か」というテーマを書くために必要な構成だったと考えられる。

（続）

〔付記〕

・本稿は平成二十二年度の卒業論文の一部である。

・本稿を作成するにあたって、高橋和幸教授にご指導いただいた。

〔注〕

・本稿で使用した作品本文は、新潮社刊『聖少女』（平成二十年二月一日刊）によった。

・引用文の傍線・傍点は、すべて引用元の本文のままとした。

(1) 倉橋由美子「インセストについて」（『わたしのなかのかれへ下』、講談社、昭和四十八年九月十五日）

(2) 『宗教学辞典』（東京大学出版会、一九七三年 十二月二十日）

(3) 澁澤龍彦「近親相姦、鏡のなかの千年王国」（『少女コレクション序説』、中央公論社、昭和六十年三月十日）

その生まれや気質や肉体的特徴によって、互いに孤独を分かち合うことのできる二人の近親者は、それぞれ相手の中に自分と似た者を発見し、これを愛するようになるので

ある。

（ここで澁澤氏は兄妹の近親相姦が描かれたルジールの『特性のない男』を引き、）

しかし両性具有よりもシャム双生児よりも、この兄妹のユートピックな愛を心理学的に一層見事に説明するものは、ウルリヒの洩らす次のような言葉だろう。

「君がなんであるか、いま判ったよ。君は僕の自己愛なのだ！」

（4）倉橋由美子「わたしの「第三の性」」（『わたしのなかのかれへ　上』、講談社、昭和四十八年九月十五日）

ところで女が男の世界に正式に所属し、したがって一人前の女とみなされるための形式は、通常結婚である。（中略）

こうして男は女を所有する。元来《もつ》ということは、男女の性的関係――一般に男が女を肉化し女は対象化されながら男に同化し、男は愛され女は愛するという関係――をつらぬく存在関係であり、他者の自由を捕縛することである。

（5）倉橋由美子「妖女であること」（『わたしのなかのかれへ　上』、講談社、昭和四十八年九月十五日）

（6）前出　注4に同じ

（7）倉橋由美子「愛と結婚の雑学的研究」（『わたしのなかのかれへ　下』、講談社、昭和四十八年九月十五日）

（8）「このノートはわざと書きおとしてあることが多すぎる。決定的な事実に関することは、なにひとつ書いていない」

（中略）

「たとえば、パパなる人物と未紀との関係ですよ。パパは未紀の母の昔の恋人らしいけれど、ひょっとすると、未紀のほんとの父親かもしれない。もしそうなら、これはみごとな近親相姦ですよ。ところがそういう肝腎の点になると、いつも曖昧にしてある。（後略）」

（9）倉橋由美子「わたしの心はパパのもの」（『道の手帖　倉橋由美子』、河出書房新社、二〇〇八年十一月三十日）

（10）ノートIで未紀が母に「男ができました」と告げる場面より。「そして母は野合ということばを使ってごく一般的な道徳上の非難で話をとじてしまいました。」

（11）倉橋由美子「作品ノート　どこにもない場所」（『倉橋由美子全作品2』、新潮社、一九七五年十一月二十日）

（12）倉橋由美子『スミヤキストQの冒険』（講談社、一九七二年六月十五日）